

【PPP2008 : No. 11】

PPPの基本思想(9) -思考、論理とパートナーシップ(2)-

21 世紀のパートナーシップの経営思考を考える場合、「責任」とは何かを明確に認識する必要がある。「私は頑張っている」、「組織は全力で取り組んでいる」など自らの努力を主張する言葉は多い。個人にせよ組織にせよ自らの目標に向かって最善を尽くすことは、極めて尊く重要なことである。こうした自らの目標に対して自ら努力することは「善」と呼ばれる。しかし、この「善」において留意すべきことがある。それは、あくまで自分自身で完結する範囲だけの問題であり、この「善」には「他」との関係は含まれていないことである。したがって、「善」の中に他人との関係を含めて見た場合、私が頑張っても必ずしもすべてが適切とは言えない状態が発生する。たとえば、いくら自分自身が目標に対して最善を尽くしてもそれが他者との関係で迷惑を生じさせ、あるいは何ら成果を上げなかった場合などである。パートナーシップは、「善」のみの追求では成立しないことになる。

社会に共通した「善」を「公共善」と呼ぶ。「公共善」とは、自分自身だけでなく他者との関係を踏まえて目標に対して最善を尽くすことを意味する。行政機関がいくら頑張っても地域や住民生活を向上することに資さない場合、「善」はあるものの「公共善」には至っていないと評価される。民間企業、NPO、ボランティア活動などでもすべて共通に指摘できる事項である。

この「善」と「公共善」の区別は、「責任」の問題にも関連する。良く指摘される責任として「自己責任」がある。自分自身が選択し取り組んだ事項について自分自身が責任を負うことである。こうした「自己責任」の考え方は「善」と親和性が強い。自分自身の目標に対して自ら全力で取り組みその結果については自らが負う。裏返せば、「自分で責任をとるのだから好きなようにやらせてくれ」といった自己中心的な主張にも結び付き易い。

これに対して、他人と関係を考慮した「公共善」と親和性が高い責任とは何か。そこには、「自己責任」に加えて「応答責任」が登場する。応答責任とは、自らの目標を達成するため他者に働きかけその他者からの反応に対してさらに応答することを意味する。自己中心、自分善がりに行動するのではなく、自ら設定した目標であっても他者との関係に常に働きかけ、他者との関係を向上させつつ自らの目標達成に近付いて行こうとする姿勢である。したがって、自己中心、自己善がりに行動し自分自身の目標に対する結果をもたらしたとしても、それは自己責任を果たしたに過ぎず、応答責任は果たしていないと評価される。

パートナーシップの形成と維持に重要な点は、応答責任の追求である。

今日において責任というと「自己責任」を強調することが少なくない。しかし、社会システムの全てが他者との関係で常に成り立っている今日のネットワーク社会では、自己責任だけを強調することは不適切であり、むしろ「応答責任」をより強く強調する必要がある。そのことが「善」だけでなく「公共善」の意識を高めることにも繋がる。

住民から「税金を払っている」ことを理由に、私的サービスとも言える領域の要求が行政に突きつけられることが少なくない。しかし、税金をきちっと払っていることを理由に自分自身への個別行政対応を求めることは、「公共善」とは言えない。なぜならば、税金の負担は「公共善」そして社会全体への「応答責任」を果たすための住民の責務だからである。